

駒場友の会

会報 第四号



駒場キャンパスの樹木

伊藤 元己

駒場キャンパスは、渋谷から京王井の頭線で約5分の都会にありながらしっかりと立ち着いた自然環境があります。このあたりは武蔵野の一角に位置していたようです。植物分類学の研究を行っている過程で、明治時代に牧野富太郎によって採集された植物標本を見ていると、近頃都心部ではほとんど見られない森林性の稀少種のなかで「産地：渋谷」と書かれたラベルのものが時々見られ、昔は広大な森林地帯であったと思われる。

東京近辺の本来の自然植生は、シイやタブノキが優先する常緑広葉樹林、いわゆる照葉樹林に当たります。駒場キャンパスの緑地から駒場野公園にかけての古い木を見てみると、シイやタブノキの大きな木があり、このような照葉樹林の片鱗がうかがえます。照葉樹林の林床には、ヤブツバキやアオキなどの低木が多く生育しますが、これらの木本種もキャンパス内で普通に見ることができません。また、駒場キャンパス付近は起伏にとんだ地形で、湧き水が多く、谷筋に多く見られる落葉広葉樹のケヤキやシデの類の大きな木もキャンパス内で普通に見かけることができ、想

像をたくましくすると昔の林の様子を思い浮かべることができそうです。

駒場キャンパスに生育している植物の中で、少々驚いたのは、ミツデカエデをキャンパス内で見かけたことです。ミツデカエデは、葉が三小葉になっていて、一見、カエデの仲間には見えないのですが、葉は対生して立派なカエデです。この種は通常は山の溪流沿いに見られるものなので、都心部でそれほど普通に見られるカエデではありません。実は、駒場の環境委員会で駒場ファカルティハウスの南の庭に邪魔な木があるので見て欲しいという話があり、実際に見に行ったところ、その木はこのミツデカエデの老木でした。確かに庭の中央に位置し、木の勢力も衰えかかっていますが、この場所でおそらく百年近く頑張ってきた木だと思えます。駒場の林の生き証人であるこの木が、人間の都合により不用意に切られないことを願っています。よく見ると南側の緑地にもミツデカエデを見つけることができました。詳しくは書きませんが、この緑地にはいくつかの絶滅危惧植物が生育しているので、昔の駒場の自然を感じさせる場所として保全され続けるよう望みます。

(広域システム科学系・生物 助教 伊藤)



ホームカミングデー

教養学部と駒場友の会共催の催し

駒場の樹木をめぐる講演会とイヴェント

講演 農学部秩父演習林長 梶幹男 教授

「樹木と親しむための二、三の心得」

教養学部 著本春樹助教

「イチヨウを観て池野成一郎教授を偲ぶ」

講演後に参加者全員で学名等を記載したプレートを駒場の樹木に取り付けます。

一・二・四教室とキャンパス内・一四時三〇分〜一六時まで

駒場に帰って

山崎 真紀

二〇〇四年の秋のある日、仕事から帰ると、郵便受けに、東京大学の封筒が入っていた。初めて目にするホームカミングデーの案内の、「もう一度、人生の原点である東大キャンパスに集い…」という一文に、私は強く惹かれた。私は仕事で知的な飢えを感じ、本当の自分を取り戻したいと願っていた。生き生きと自分を表現していた駒場での自分がまぶしく思い出された。人生の大切な時間を過ごしたキャンパスへもう一度行き、あの頃自分がどんなことを感じながら過ごしていたかを思い出したいと思った。こうして私は就職して初めて駒場を訪れた。

渋谷から井の頭線に乗って、秋の青空の下に駒場キャンパスが見えてくると、懐かしさが胸いっぱいこみ上げてきた。

一号館の教室に足を踏み入れ、机に座ってみた。学生時代と同じ時間がそこには流れていた。机に刻ま

れた時間にそつと手を重ねた。

銀杏並木に出ると、行き交う学生たちの中からふと友達が出てきそうな気がした。噴水の横に立花隆ゼミで植えた木にハツサクが、枝もたわわに実っているのに月日の流れを感じた。

それから、イギリス科の研究室で、恩師、先輩、同級生と再会を喜び合った。皆で一つの大きな輪になり、とても温かい空気の中でアフタヌーンティーをいただいた。私は、まるで学生に戻ったように、自由に、心の底から自分の言葉で語っていた。会ってすぐに本質的な深い話ができることがうれしかった。

駒場寮の跡には、すばらしい図書館ができていた。かつての図書館では、奥の暗く寒い中二階で、OEDを書架から机に運んで勉強していたものだが、真新しく生まれ変わっている。

新しい書架で、シェイマス・ヒーニーの詩集に再会した。扉のヒーニーの大きな写真は、変わらず温かく微笑んでいる。まるで、「おかえり」と言っているような気がした。つい先程、イギリス科の部屋で、四年生の時に聴いたヒーニーの朗読会について中尾先生と語り合ったことを思い出し、うれしかった。

新旧が混在する駒場だが、立て看や響き渡るブラスの音、そして立ちこめる銀杏の匂いは、私を学生時代に引き戻した。

イギリス科の研究室から、銀杏の葉を踏みしめながら、恩師の木畑先生と、木畑先生の師の青柳先生と、駒場全体のレセプション会場のファカルティハウスへ歩いた。駒場で続く知の営みの中にいることをとても幸せに感じた。

レセプションは、やはり駒場らしくアットホームな楽しい会だった。ここでも、懐しい人々と再会した。在学中には話す機会がなかった先生方ともゆっくり話ができてうれしかったし、初対面の人も、まるで

学生時代から知っていたかのように話が弾んだ。駒場では、少人数の学生に先生方が真剣に向かい合っ下さざり、学生としてとても大切にされていたのだと気づいた。全力で相手に語れば、全力で答えが返ってくる、魂の対話が駒場にはある。だからこそ、駒場は今でも私にとって大切な場所なのだ。

ホームカミングデイから帰って、再びフランス語を学び始めた。ゴッホが弟テオに宛てた書簡集を読んでいる。朝の冷たい空気の中で、原書と辞書に向かう時、私には駒場での日々が戻ってくる。自分の中に抑え込んでいた知的な探究心を解き放ち、私は徐々に精神の自由を取り戻した。

駒場に帰って、私は、失ってしまったと思っていた学生時代の自分の輝きは、まだ、自分の中に確かにあるということを見つけた。かえがえのない「ホーム」に今年もまた帰りたいと思っている。

(一九九九年イギリス科卒)

ホームカミングデイ

教養学部・駒場友の会共催

特別講演会

「科学と社会のよりよきコミュニケーション」

お話し 立花隆氏、黒田玲子教授

一四時より一五時三〇分まで

九〇〇番教室(旧倫理講室)にて

ユリア・チャプリーナ ピアノ・コンサート

十一月三日(木)一四時より

数理科学研究科棟大講義室にて

多数の申し込みがありがとうございました。定員に達しましたので申し込みは打ち切りました。

駒場の「駅前留学」

ジョン・ボチャラリー

「久しぶりの駒場」を見にこられるOBとOGながら、東京大学教養学部の急速な変貌振りに驚かれることでしょう。駒場寮や古い研究棟が消え去り、新しい図書館などが立ち並ぶようになりました。「もの」だけでなく、「ひと」もだいたい多様化してきました。女子学生やより円熟した年齢の学生が増えてきました。その多様化した学生共同体の中で特に目立つのは約四〇〇名の留学生でしょう。日本の大学教育の国際化をリードする東京大学だけあって、相応しい人数といえましょう。

駒場キャパスの「国際化」の中で、短期交換留学プログラムAIKOM(Abroad in Komaba)が注目に値します。今年創立一〇周年を迎えたAIKOMは東大唯一の学部レベルでの交換留学プログラムであり、また(旧)国立大学のこの類のプログラムの中で最も成功している例だといわれています。

現在、教養学部は一六カ国の二四大学と交換協定を結んでいます。この協定に基づいて、毎年二十数名の学生をパートナー校から受け入れ、同時に同じぐらいの人数を駒場から各大学へ派遣しています。学生は相手大学の学費などを納入する必要はなく、母校の学費のみを支払い、また大学は入ってくる学生の住まいを用意します。(東大の場合、受け入れ学生は全員東京大学三鷹国際学生宿舎に入ります。)AIKOMはJASSO(独立行政法人 日本学生支援機構)の援助を仰ぎ、なるべく多くの受け入れ学生に奨学金(月額八万円)を与えています。この一〇年で、AIKOMが二四〇名もの優秀な若者を駒場に受け入れ、二〇九名の優れた東大生を駒場から協定校へ派遣できたことを誇りに思っています。

AIKOMで駒場に来る留学生のために、一年間の特別な学習システムを開発しました。先ず、日本語教育を初級、中級、上級の三つのレベルで行っていますが、このために独自の日本語教科書を制作しました。より多くの学習者に役立つように東京大学出版会から発行され、学外からも高い評価を受けています。日本語は選択科目ではありませんが、週五コマというハードなスケジュールにもかかわらず、ほとんどのAIKOM生が毎年楽しく参加しています。

AIKOMの学習システムのもう一つの特徴は英語による日本事情関連のカリキュラムです。「日本文学化分析」、「日本社会分析」といった概念的な授業のほかに、日本の文学、芸術、政治、経済などについてより専門的な内容の講義も提供しています。また、多くの教員の協力のもとで開講される「リレー講義」が評判になっています。この講義では、毎週違う教員がそれぞれの専門分野のホットなトピックを学生に紹介しています。これらのトピックについて、ゼミも開き、学生同士の率直な討論の機会を用意しています。特定のテーマに関して深い関心を持つ学生のためには、個人指導の授業もあり、一人の教員の助言を受けながら研究論文を仕上げる機会を提供しています。その他に、地方文化についてはフィールドワーク中心の授業や関東近辺の見学もあり、教室内だけでなく、自分の肌で日本の社会に触れる機会を頻繁に提供しています。

何ととっても、AIKOMプログラムの一番の特徴は日本人学生の位置づけでしょう。多くの大学では短期交換留学プログラムはその大学の留学生センターの管轄となっています。当然ながら、その場合、留学生は学部所属の日本人学生と教室で会うことが極めて少なくなってしまう。東大では、AIKOMは教養学部の後期課程(つまり、旧「教養学科」)に

属しています。日本人学生が自由にAIKOM関係の授業を履修することができ、「選択科目」または「英語」の単位を獲得します。同年輩の学生と意見を交わしたり、友達になったりして、日本人学生にとってもAIKOMは「学内留学」の場となっています。また、多くの大学では、海外から学生を受け入れても、日本人学生の語学達成度などの理由でフルに学生を派遣することが難しいといわれています。幸いに、駒場では文字通りの交換留学を実施しています。

奨学金削減という大きな問題があるものの、AIKOMの更なる発展のために今後とも学内外の皆様のご助言とご支援を賜りたいと思っております。

(超域文化科学・比較文学比較文化 教授)

駒場に咲く野草

デニツツア・ガブラコフ

電車は右へ通り過ぎ、また左へと通り過ぎる。遮断機を潜れば、駒場キャンパスの梅林。遮断機が上がるのを待っていると、そばのコンクリートの壁の罅の中に蜥蜴が隠れているのに気が付く。丸い形をした輝の奥には土が溜まっているのか、壁自体がぼろぼろと粉っぽくなっているのか、とてもとても小さい花を付けた一本の緑の植物が生えている。フランスの詩を思い出す。Une lézarde dans une lézarde。(罅の中の蜥蜴)それに北原白秋の詩を思い出し、自分でも詩を作ってみたくなる。『蜥蜴が美しく振り返る。』何度も何度も振り返る。逆時計周りに振り返り、記憶の中に螺旋を抉る。写メールにこの瞬間を捕らえながら、駒場のキャンパスで比較文学の分野で研究活動を始めてからもう四年が経ったということ思い出す。駒場のキャンパス…。

二月の梅の香り、四月の桜、六月の紫陽花、いつも

丁寧な挨拶する警備員、元気に走るスポーツ部の学生、チラシを配る演劇クラブの学生、大きな葉っぱを手を持って通り過ぎる三歳児の行列、怒った鳥、熱帯雨林のように生い茂った森、二郎池、キャンパスのいずれの温室、学生の弁当を覗こうとする鳩、芋煮会を楽しむ人々、大きくて新しい建物のペランダの外側の綺麗に刈った芝生、壊れかかった建物から聞こえるピアノの調べ、走り回る黒猫、ロシアの作家トルストイを思わせるような可愛い孫を連れた真っ白で長い髭のお爺さん：銀杏並木：駒場のキャンパスをこんなに長く語ってもほとんど動詞が要らない。何も起こらない何も変わらない、銀杏並木の葉っぱの

日本におけるドイツ年・特別展示

「デッサウ・バウハウスとブルク・ギービツェンシュタイン大学展」 ギャラリー・トークのお知らせ

「日本におけるドイツ年2005-2006」にちなみ、ザクサン・アンハルト州の協力により駒場博物館で上記の展示会が開催される運びとなりました。駒場博物館と共催で以下の先生方のギャラリー・トークを開催します。是非ご来場ください。

11月5日(土) 講師: パウル・クレイ協会事務局長 新藤信氏

11月12日(土) 講師: 教養学部 加藤道夫 教授

11月26日(土) 講師: 教養学部 池田信雄 教授

各回いずれも駒場博物館にて14時より 申込不要

色以外。

学問の門を潜った人たちにとって異なる時間が流れているかもしれない。一日中国書館や研究室で過ごしてしまう人にとって、時間だけではなく、空間まで別の感覚を帯びる。図書館の棚に並んだ本は、どれもまったく予想の付かない世界への窓で、そこに入っ
てしまえば、駒場にながら別の文化、別の時代に没頭できる。研究活動を行う人たちはこのように半分駒場にいながら、半分自分の研究論文で再現しようとしている遠く隠れた世界をさまよっている。私も気が付かない内に一歩一歩「研究」の中に進もうとし、時計台の時計が回っているのにも拘わらず、私にとって時間がある意味で止まってしまった。外国人として自分の考えを表現するのに他の人より何倍も時間がかかり、場合によって唯一の話し相手は過去に消えた作家や詩人だけになる。そのような過去の人の文章を読むと、彼らが私にいろいろと話し掛けているのを感じるが、それに対して私は論文の形で反応しなければならない。上手な表現への鍵はなかなか見つからない時が多い。

電車の音と生い茂っている叢。急な坂路を速やかに降りると、次は同じぐらい急な坂を登らなければならぬ。それは図書館が閉館してから夕餉の買い物へと向かう下北沢への路。武蔵野の面影が残っている池ノ上付近を毎日二回通る。帰りは重い買い物袋を持っているので、急な上り坂はやはり疲れる。坂と坂が落ち合うあたりで少し休憩をする。大都会だとは思えないぐらいに穏やかな景色。菜の花、白粉花、野生の百合のような花、最近鋭い茎を槍のように突き出しているものが現れたかと思ったら、彼岸花だった。そつした植物の前に建てられた塀の棒に誰かが落とした小さな鍵が紐で結ばれている。もうずっと吊るされているから完全に錆びてしまって、暖かい

赤褐色が背景の緑からくつきりと浮き上がる。鍵穴が必ずどこかに存在しているはずだが、通りすぎる人にとってそれは秘密のまま。写メールでそれを撮ろうと思っているのは私だけ。そして部屋へ帰るために急な坂を重い買い物袋を持ちながらゆっくりと登り始める。諦めないで論文を書き終えたい。

(超域文化科学・比較文学比較文化博士課程在学中)

駒場友の会講演会

講演者 本間長世名誉教授・駒場友の会会長

講演題目 「雄弁について」

日時 12月3日(土)14時より

場所 学際交流ホール

(旧教養学部図書館現アドミニストレーション棟三階)

申込は不要です

皆様のご来場をお待ちしております

編集後記

「駒場友の会」会報第四号をお届けします。今回から活字を少し小さくしました。紙幅は限られています。出来るだけ会員・会友の皆様の記事を掲載できるように努力したいと思えます。

秋には友の会主催・共催の文化行事が多数あります。

ですが、十二月三日(土)には「駒場友の会講演会」の第一弾として会長の本間長世先生の講演会を開催いたします。多数のご来場をお待ちしております。(高)

柔らかな秋の光に包まれた
テラスでお食事とコーヒーを

ルヴェゾンヴェール駒場

駒場友の会会員・会友の皆様がお食事の際に注文なさったコーヒーは、支払いの際に会員会友証を提示下さいますと無料となります。

営業時間:11:00~14:30; 17:00~21:00

Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902

駒場ファカルティハウス内

駒場友の会会報 第四号

平成十七年十月十二日発行

発行人 高橋 宗五

駒場友の会事務局

〒一五三―八九〇二 目黒区駒場三―八―一

東京大学駒場ファカルティハウス内

電話 〇三―三四六七―三五三六

メールアドレス

info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp

ホームページアドレス

http://www.komeda.c.u-tokyo.ac.jp/lovekomaba/